北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」
会報 かいほうノーフェンス

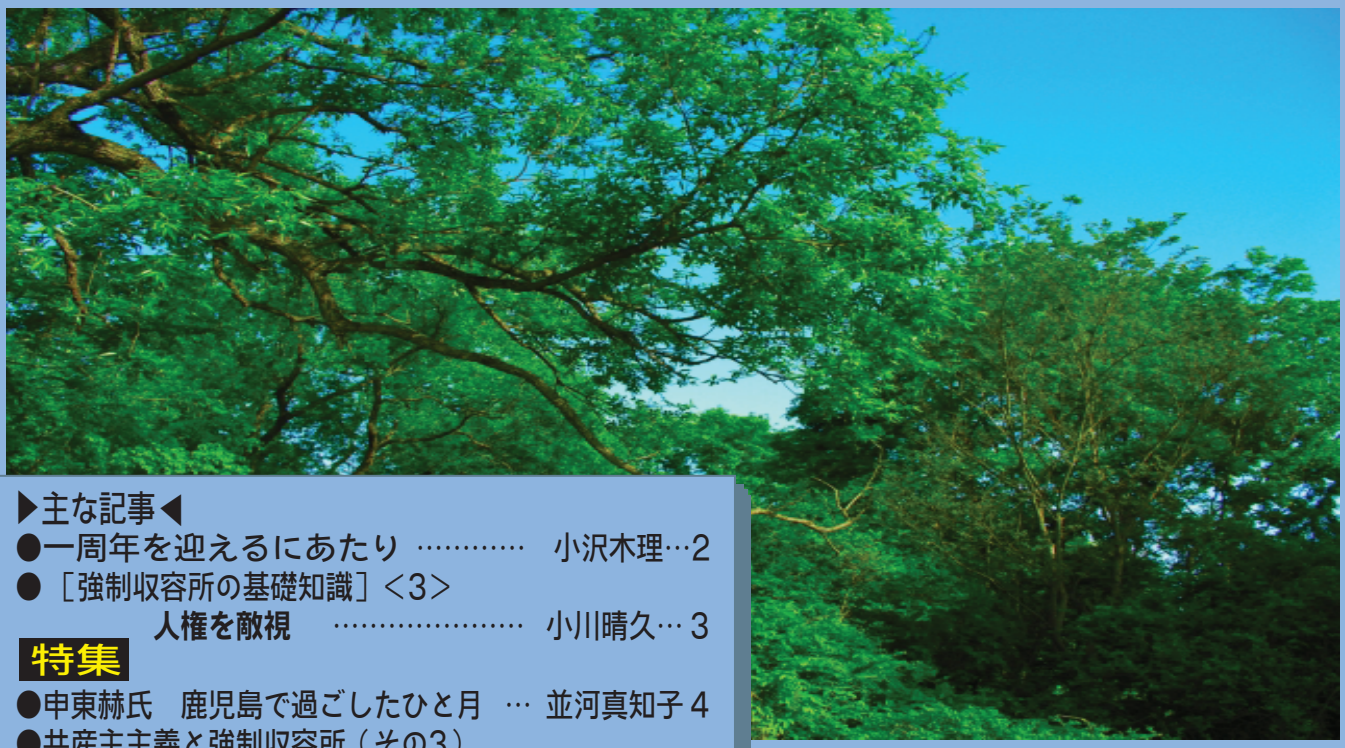
NO FENCE

(NO FENCE IN NORTH KOREA)
NO FENCE

やさしい気持ち、人の痛みを感じる気持ち、誰もが本来持っているそういうものとわたしたちは出会いたい。

vol.4
2009年5月

E-mail: nf-staff@netlive.ne.jp
〒102-0093 千代田区平河町 1-5-7 ー203 TEL&FAX 03-3262-7473 http://nofence.netlive.ne.jp 【郵便振替口座】 NO FENCE／00180-1-707147



▶主な記事◀

●一周年を迎えるにあたり …… 小沢木理…2
●［強制収容所の基礎知識］<3>
人権を敵視 …… 小川晴久…3
特集
●申東赫氏 鹿児島で過ごしたひと月 … 並河真知子 4
●共産主主義と強制収容所（その3）
姜哲煥の『平壌の水槽』を読む（上）… 小沼堅司 …8

特集

収容所で生まれたシン・ドンヒョク氏 鹿児島の市民たちを前に語る

なびか農園 ふくろうの森にて

一周年を迎えるにあたり

この会は、現在副代表を務める小川晴久氏の熱い想いが発火点となって結成された。そして非力ながら、尊い皆さんのご支援があって、ようやく発足から一周年を迎えることが出来た。しかし平和や人権問題を熱く語る人たちの中で、 隣国の問題が俎上に乗せられることは滅多に無かった。 そんな寂しい環境の中、私たちは小さな歩幅なりに一歩一歩踏み出した。

■昨年（08年）12月には、強制収容所廃絶のための東京国際会議を開催し、海外からのゲストをははじめ何人もの方々との出会いから、次の活動に繋げる方向性を当会でも再確認できた。

デービッド・ホーク氏、ラジブ・ナラヤン氏、キム・サンフォン氏らの元国連やアムネスティー等で任務経歴を持つ方々や、海老原智治氏のようにチェンマイで「アーンカ」（通称名）を立ち上げ、拉致された人たちの救援活動を行っている方など人権活動家たちから、力と智慧を頂いた。 北朝鮮問題で活動している諸団体と、アジア人権人道学会設立準備にも参加できた。08年度の大きな収穫のひとつは、地道ながら人権問題に関心のある個人や団体と次に繋げる接点ができたことである。

また、1939年の英国の白書を発見。そこには、ナチの収容所についての記載がある*。ナチ収容所ブーヘンバルトの存在に無関心を装い、結果拡大させていった時と同様、その白書は、フィリップ・ミュラーのことば『世界はなぜ黙っているのか』と共に、北朝鮮の収容所に関して寡黙でいる今の私たちに対してのまさに警告そのものであると理解できた。

（「ブーヘンバルト」とは、ドイツ東部にあるユダヤ人収容所を意味し、今その跡地は公開されている）

■今年09年は、その「点」を、延長し「線」にしていかなければならない。どこまでの長さその線を引けるか、私たちと多くのみなさんとにそれは委ねられている。

活動テーマは、情報の共有化を“国際的規模で広げていく”ことである。具体的には、その延長線上には、“『国際刑事裁判』に提訴”がある。 そのための手続きに必要な材料の整備が必要になる。それは、実態の『証言』『証拠』である。

この国際刑事裁判所（ICC）の条約として、 国際社会全体の関心事である最も重大な犯罪に関し個人を訴追するという趣旨の「ローマ規定」が02年7月に制定された。従って制定日以降の証言や証拠が最重要視される。

今年の3月4日、ＩCCは、戦争犯罪と人道に対する罪などで、スーダンのバシル大統領に逮捕状を出した。ダルフール紛争をめぐる「多数の虐殺、レイプ、強制移住について、大統領に責任がある」という理由である。勿論、これで全て解決に至る訳ではない。大事なことは、人権人道問題に、国境を理由に放置してはならないという認識が同じ人間同士の間で喚起されることだと思う。

水も、空気も、人も繋がっていて、その影響は自分とは切り離せない存在であるということが実感され共有されることだと思う。

日本には“世界の良心”とまで称えられた安達 峰一郎がいた。明治から昭和に掛けて活躍した日本の外交官で国際法学者。後に常設国際司法裁判所所長まで務めた人だ。その安達氏が1934年に亡くなった時、日本ではなく裁判所が置かれているオランダで国葬が営まれた。各国から尊敬と信頼を集めた氏の存在を、私たち日本に住む者が知らなさすぎる。

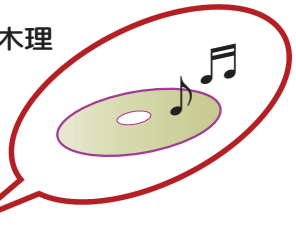
今年度は、国内外へ収容所問題を発信していく活動はもとより、地道なデーターの整理や情報収集活動が重要になってくると思う。

常に言われる北朝鮮脅威論は、疲弊しきった北朝鮮の実態の前には説得力がなくなっている。

今再び、「人間個人の人権重視」が、世界平和への道標だという考え方が叫ばれだした。見捨てられる人権、抹殺されるいのちを無くすため、当会の強制収容所廃絶活動の広がりや支援が枯渇しないよう、多くの方々の勇気ある小さな一歩を切に期待したいと思う。

共同代表 小沢木理

※ナチ収容所関連部分を翻訳した
冊子は200円でお分けしています。



誕生！

自主制作で作ってくださった楽曲『 NO FENCE 』
（当会の団体名 " NO FENCE "と同じ曲名）が CDになりました。
作詞・作曲は沖縄の著名シンガー城間健市氏／制作ネットライブ
頒価 700円で当会でも扱っています。(送料込み価格/振込先は表紙参照)
ロック調のとてもエキサイティングな歌で勇気が湧いてくる歌です。
ご希望の方は" 楽曲 CD『NO FENCE』"と明記してお申込ください。

［北朝鮮強制収容所の基礎知識］<3>

人権を敵視

小川　晴久

北朝鮮の人権状況を理解する上で西側諸国（資本主義国 、日本もその一員）が最も理解しにくいのは 、北朝鮮当局の人権に対する態度です。 北朝鮮の現憲法には人権条項があり、 憲法上人権は保障されています。しかし強制収容所体験者　安嚇(アンヒョク)氏が１９９５年来日して我々を驚かしたことの一つに、 韓国に亡命するまで人権という言葉を知らなかったという事実があります。 私はその後韓国に亡命したピアニストにも尋ねました。 憲法教育を受けたことがありますかと。 両親の考えに従っていればいいのだと思い、 育ったというのが彼の答えでした。 信じがたいことですが、北朝鮮では憲法教育が行われていないと断ぜざるを得ません。今回はこれを取り上げます。

〈現憲法の人権条項〉

北朝鮮の現憲法は１９９８年に改定された 「朝鮮民主主義人民共和国社会主義憲法」です。 驚くなかれ人権は以下のように、明文化されています （人権という言葉は使っていませんが）。

第６４条　国家は、すべての公民に真の民主主義的権利及び自由、幸福な物質文化生を実質的に保障する。

第６７条　公民は、言論、出版、集会、示威及び結社の自由を有する。

第６８条　公民は、信仰の自由を有する。

第７９条　公民は、人身及び住宅の不可侵、信書の秘密を保障される。法に基づくことなしに、公民を拘束し、又逮捕することができず、また家宅捜索をすることができない。

現行の刑事訴訟法の第５条にも「国家は刑事事件の取り扱い処理では人権を徹底して保障するようにする。 」と明記されています。（『朝鮮民主主義人民共和国法典（大衆用）』２００４年、８４１頁）

〈十大原則（主体思想）が事実上の憲法〉

このように現行の憲法や刑事訴訟法に基本的人権が明記されていながら、国民はなぜそれを知らないのでしょうか。 それは１９６７年５月に唯一思想（主体思想）が登場し、１９７４年２月に 「党の唯一思想体系確立の十大原則」が登場してから、憲法よりは「十大原則」の方が遥かに優位に置かれ、この「十大原則」が事実上の憲法になっているからです。 現に現憲法にはそれまでなかった序文があり、 主体思想の骨子が金日成同志を主語にして １１か条述べられており、これが憲法本文に君臨しています。 この序文と憲法本文の人権条項とは内容が完全に矛盾します。憲法教育が行われなくなったのは主体思想(唯一思想)の登場からでしょう。

〈人権擁護はわが体制を崩壊させる戦略 ――１９９０年の金日成教示〉

人権に対する敵対意識は金日成の１９９０年５月の演説の中で明確にされます。「帝国主義者たちは民主主義と人権擁護を， 我が社会主義を瓦解させる戦略としている」と。端的に言えば、西側諸国は人権を我が体制を崩壊させる手段に使っているという主張です。これでは人権教育、憲法教育をする筈がありません。金日成のこの指摘は 「人権擁護は我が社会主義を瓦解させる平和的移行戦略」 と定式化されました。 この人権敵視は「人権は国権である」 という規定にまでエスカレートします。北朝鮮の労働新聞は１９９５年６月２４日に「真の人権を擁護して」というｽﾝｼﾞｪｽﾝ、ﾛﾖﾝの連名の論文を発表しました。わが国こそ真の人権を擁護する国であるとくり返し西側諸国を口汚く罵りながら、次のように言います。

「人権とは国権であり、国権とは自主権である。
自主権を喪失した人民は、どのような人権に対
しても、ものを言うことができない。」

人権とは基本的人権であり、 個々人の人権のことです。集団の人権というものはありません。世界人権宣言を具体化した「市民的及び政治的自由に関する国際規約」 （自由権規約）第１０条は、自由を奪われたもの（つまり囚人―引用者注）も人間の尊厳は保障されなければならないと言っています。北朝鮮当局者は自らこれに加盟していながら、 この条項の精神が理解できていないのです。 強制収容所に裁判もせずに人びとを片っ端からぶち込む態度は、 今引用した二行の一文によく表われています。 人権というものを全く理解できていないだけでなく、人権を敵対視しているのです。

〈北朝鮮当局の最大の弱点〉

しかし彼らの弱点は、人権をこのように敵視しながら、憲法本文では保障せざるをえず、また国際人権規約にも１９８１年加入していることです。後者をショーインドウに掲げ、隠れ蓑にして、世界と自国民を欺いていることです。ここに彼らの最大の弱点があります。世界はここを鋭く衝（つ）いて行く必要があります。最大の弱点といえば、北朝鮮の山の中の強制収容所の存在をあげる必要がありますが （これは最大の恥部ですが最大の弱点でもあります）、強制収容所は反人権の極致です。 憲法上の人権条項は人権を尊重しなければならないという人権擁護の極致です。二つの最大の弱点は実は一つのものの裏表に当たります。 北朝鮮の強制収容所の廃絶を訴えていくとき、 体験者の手記を読んでもらうことが何より大事ですが、 人権を巡る当局の以上の欺瞞を訴えていくことも大切です。

北朝鮮の強制収容所で生まれ、そこから奇跡的に脱出した唯一の青年が
鹿児島と福岡で収容所体験を語った。

東赫氏が割ってくれた薪の前でパチリ。我が家の人気者、猫の金ちゃんを東赫氏は「金ちゃん、金ちゃん」と言って撫でていた。

申東赫（シン・ドンヒョク）氏 鹿児島で過ごしたひと月

・申東赫著『収容所に生まれた僕は愛を知らない』
（李洋秀訳，KKベストセラーズ　2008年）

報告／鹿児島エリア部長　並河真知子（なびかまちこ）

鹿児島証言集会ドタバタ記

■２月１３日（金）晴れ
AM１１：３０、東赫氏、鹿児島空港着。
仕事のため出迎えにいけない私に、入国管理事務所より電話あり。東赫氏について、強化月間でもあり不審な人物ということで事細かく質問あり。やっと疑いが晴れ、許可がおりて、ホッ。出迎えの長女（紫苑）、脱北者支援・かごしまのメンバー、待たされてゴメンね。

■２月２８日（土）曇り
東赫氏、韓国との電話の後、頭を抱える。
私「どうかしたの」。東赫氏「参ってしまう」とジェスチャー。
東赫氏「３月２１日を延ばせないか。」
私「えーっどうして!?出来ない出来ない!」
既に実行委員会をもち、川辺での証言集会を３月２１日に決定して、友人知人には通知していた経過がある。
ノーフェンス事務局長の宋さんからも電話があり、３月21日はオーストラリアで証言があり、申東赫が中心だから、キャンセルは無理とのこと。何で今頃！　あれほど確認をして、オーストラリアは行かないから大丈夫だと言ったのに。韓国側も困惑しているらしいが、当然だろう。
実行委員の市議、野口氏へ事の顛末を電話で相談。東赫氏、子供たちに「私はおバカさん」と言い、笑っている。事の重大さを理解していない。参ってしまうのはこっちだ!
野口氏「あと一週間しかない」。私「何人かの友人だけでも聞いてもらえたら・・・何とか、やりたい」。野口氏「やりますか」。

聴衆の前で語る通訳の李さんとシン・ドンヒョク氏
photo by.Misako

■３月１日（日）晴れ
日程の変更を実行委員会のメンバーに電話。東赫氏、事の重大さを理解したのか、電話の横でだんだんうなだれていく。

■３月２日（月）晴れ のち 曇り
パン焼きの準備より電話が忙しく、仕事がはかどらない。深夜まで仕事。

■３月３日（火）雨
早朝より、パン焼きの準備。焼きたてパンを東赫に食べてもらう。東赫氏「美味しい!」
遅くまでパンの袋詰め作業、東赫氏にも手伝ってもらう。

■３月４日（水）雨
AM１０：３０、パンの販売で鹿児島市内へ。東赫氏も同行。
PM４：００、記者会見のため仕事を切りあげ鹿児島県庁へ。テレビ局の不祥事が露呈、記者会見室は取材陣で黒山の人だかり。しばらく待たされる。
PM４：３０、野口氏、東赫氏、通訳の李さん、韓国人の大学生と私とで記者会見。南日本新聞、西日本新聞の二社が取材対応。各新聞社全部が取材に来ても良い深刻な人権侵害のニュースではないかと、新聞記者に叫びたくなる。
PM６：００、野口氏に渡されたばかりの大量の（東赫氏証言集会の）チラシを、意を決して、東赫氏と２人、鹿児島中央駅で通行人に配布。少しはさばけたかな？
PM７：００、東赫氏、めまいがするというので中央駅をあとにする。彼を車に乗せたまま、友人の店や知人宅を訪ね、チラシ配布。
PM１０：００、疲労困憊で帰宅。東赫氏「今日はいっぱい感謝します」とパソコンの翻訳機能で話す。

■３月５日（木）雨
南日本新聞朝刊に、東赫氏顔写真入りで掲載。記事を読んで電話の問い合わせが数件あり。明日のパン焼きの準備をしながら、友人知人に集会変更の電話を入れる。
深夜２：００、こたつでそのままダウン。

■３月６日（金）雨
５：００起床、窯に火を入れる。
証言集会を明日に控え、普段以上に沢山のパンを焼く。仕事中も電話の応対。パン包装、深夜までかかる。買い物に行く暇なし。

■３月７日（土）快晴
AM３：００起床。結局４日間シャワーなし。ピザ用に窯に火入れ、ピザ生地を捏ねる。
M氏に軽トラックでテント３梁を運んでもらう。テント設営に時間がかかる。テント部品不足で再び借りに走ってもらう。
バタバタと買い物に行く。
AM１０：３０、買い物の帰り、近くの小学校にお願いしていた折りたたみ椅子を６０脚程借りに行く。大変大変、間に合わない。家に着いたら人がいっぱいで、テレビ報道の取材体勢。うわー、どうしよう！　化粧もしてない!
AM１１：００過ぎ、市議の野口氏やきもき。お客さんを待たせてしまい、どうしよう。
市議の友人、小川氏の手配で、頼んでいないのにＮＨＫテレビの取材。ありがたい。
通訳の李さん、遅れて見え、やっと証言始まる。東赫氏の証言に皆、驚きの声を上げ、次々に質問があり、止まらない。
参加者の「川辺に来られたのも良い経験になったと思う。過酷な運命だったと思うが、どうかこれから幸せになって欲しい」というメッセージは、ＮＨＫテレビの夕方から夜のニュースでも放映。
PM１２：００より、東赫氏サイン入り本の販売。ピザの注文でパン窯の周りは大忙し。通訳の李さん、東赫氏にも食べてもらう。
PM１：００、ヨガ体験でリラックス。鹿児島大学オーケストラメンバー４名による弦楽野外演奏。緑に囲まれ素晴らしい曲にうっとり。
約６０名の参加者があり、まずは良かった良かった。夕方はＮＨＫテレビを観た友人より、「成功だったね」と電話あり。以前から集会を楽しみにしていたジェフさんはこの日の午前、男児誕生のため欠席。おめでとう!
夕食はお好み焼きを食べながら居眠り。今日も風呂なしで（５日目）こたつでそのまま、ダウン。終わった、終わった！　東赫氏お疲れ様。

■３月１４日（土）晴れ
証言の為、東赫氏と私（並河）と長女（紫苑）、福岡で１泊。
３月１５日（日）晴れ
PM１５：３０、東赫氏、福岡国際空港から韓国へ。紫苑と私とでお見送り。抱き合ってお別れ。
元気で、また遊びに来てね、さようなら。

”脱北者支援・かごしま”（並河さんも主要メンバー）主催、NO FENCE鹿児島支部協賛で開催の申東赫氏証言集会ニュースは、県庁での記者会見内容と共に、西日本新聞、南日本新聞に写真入りで紹介された。（編集部）

ドンヒョク
東赫氏１ヵ月のホームステイ

私は今、川辺の満開の桜を眺めながら、彼にも「見せてあげたかった。」という想いがある一方、「でも彼はおそらくこの様な美しい光景にそれ程感動しないかもしれない」という気持ちもある。

東赫氏とはノーフェンスの発足会で初めて東京で出会った。
国際会議で２度目、３度目は私に母の面影を求め、日本語も全く分からぬまま鹿児島へ訪ねて来たのである。
我が家の生活は薪を燃料にパンを焼く仕事で、彼は薪割りを進んでやってくれた。その薪割りの上手さは舌を巻く程で、とりわけ労働に関しては、非常に丁寧で器用である。
でもそれは、子供の頃からあらゆる労働に従事させられていたことを思い起こさせ、私は悲しく思った。　もっとも収容所ではミスを起こしたら命と引き換えになる訳であるから、上達せざるを得ないのであろうが。
食卓を共にして１ヵ月。彼はすぐ満腹になる。そして私が美味しいと思うものは食べられない。我が家のとびきり美味しい烏骨鶏の半熟卵、生牡蠣などに手をつけない。恐らく珍味というものを共に味わうことは無いだろう。何しろ、「何を食べても味がしない」という訳だから。
彼が最も望むものは愛情だし、食事を愉しむとか、風景を楽しむとか、普通の人間らしい生活スタイルを培っていないので、私たちの感覚とはズレがあるのを感じる。
それでも彼は物覚えが早く、パソコンも操作しており、私は全く普通に接していた。だが一見、健康的で私たちと何の変わりもないように見えて、実際には精神面は傷つき、肉体は雨が少し当たっただけでも腰が痛くなるといった問題を抱えていた。身体のダメージは深刻で、精神面でも疲れやすい。恐らく、羽を痛め傷ついて飛べない鳥のイメージが彼にはぴったりかも知れない。
各国で収容所の証言をする度にフラッシュバックして、忘れようとしてもそれができない彼の、生活スタイルの影響もあろう。「ＰＴＳＤ（心的外傷後ストレス障害）」というものは、一生脳裏から消えることはないかと思う。
彼の味覚までをも奪ってしまった収容所生活は、すっかり人間をかえてしまったということであろう。

だが、毎日、ピストルを持った教官から親を怨むよう教育され、愛という言葉すら知らず、お互いに監視、密告を強要されたにも拘わらず、彼の内側から溢れる愛情は、枯れることはなかったという事を申し上げたい。

こたつで寝てしまった私や娘には毛布を被せてくれたし、一匹の秋刀魚を４人で分けた時、彼は頭と中骨しか食べなかった。また、寒さに震えながら強風の岩壁で釣りをした時、彼は自分のダウンジャケットを脱いで薄着になってしまったにも拘わらず、娘の肩にそっと掛けてくれた。そしていつの間にか食器棚のきしみが直り、ドアの取っ手が新しくなっていたりもして、彼の気遣いが随所で感じられた。
このような、傷付いた彼の、押し付けがましくない、さりげない自己犠牲の愛情には、感動すら覚える。私たちは自由な生活に慣れっこになっていて、小さなほんの少しのささやかな暮らしの喜びを忘れかけている。親子で食卓を囲む喜び、花を愛でる喜び、気がつけば私たちは小さな幸せにいっぱい囲まれているのだ。
彼の慈愛に満ちた愛情は、私たち親子３人に注がれた。収容所の異常な生活は、東赫氏という一人の人間の尊厳までは破壊できなかったことに心から感謝し、喜びたい。東赫氏の訪れは、私たちに平凡だけれど普通の生活ができる幸せと喜びを教えてくれた。それに何より、人間の本質である愛するという行為を示してくれた。

彼の愛してやまない故郷、北朝鮮に、１日も早く平和が訪れますよう、私たちも一緒に東赫氏と手を取り合ってその地を踏むことができますよう、願ってやみません。

※東赫氏は２１年２月１３日から３月１４日まで鹿児島県川辺町に滞在していました。

（本文と写真 / 並河真知子）

申東赫氏「拉致被害者を救う会 福岡総会」での講演

平成２１年３月１４日、「拉致被害者を救う会・福岡」の招きで東赫氏と私（並河）、長女の紫苑も連れて、福岡へ行く。
当日は、福岡市内での街頭活動後に行われた総会に講演者として、拉致被害者家族連絡会の斉藤文代さん、平野フミ子さん、特定失踪者問題調査会代表の荒木和博氏、救う会大分代表、救う会熊本、東赫氏と私（並河）の計７人が招聘された。
福岡市人権啓発センターには救う会の役員含め７０人くらいが集まり、私達は１８：００から２０：００まで、警護される中での講演だった。ありがたいことに、ノーフェンスの栞がコピーされ、資料として用意されていた。
東赫氏は講演の中で食べ物の好みを質問された時、「何を食べても味がしない」とショッキングな発言。幼少時からの塩ととうもろこし粥だけの偏った食生活というのは、味覚破壊に繋がることを人体実験で証明した。
やはり拉致被害者らしき人の消息を尋ねる質問もあったが、「お互いに監視体制にあり、私語もままならない状況なので分からない」と答え、収容所がいかに管理統制された生活であったかを物語った。
家族会は政権交代の度に翻弄され、日本政府そして政治家との二重の戦いを強いられていて、救う会副代表の「私たちに評論家はいらない！」の言葉には拍手が沸き起こっていた。ノーフェンスの立場からも、支援者の方たちとは、北朝鮮人権問題で連携し、各国政府や国連への訴えを継続して進めていく必要性を感じた。交流会にも参加してほしいとの要望で参加、支援者の方たちと打ち解けたお話ができた。良い機会を与えられたことに感謝したい。

共産主義全体主義と強制収容所（その3）

姜哲煥（カン・チョルファン）—『平壌（ピョンヤン）の水槽 北朝鮮 地獄の強制収容所』を読む（上）—

小沼堅司（オヌマケンジ）

国際世論の無知、無関心

著者・姜哲煥（カン・チョルファン）は1992年、耀徳（ヨドック）の15号政治犯収容所を生き延びたあと、「禁止されたラジオ放送を聴いた」罪で再び逮捕されそうになり、脱北した。彼が逃れてきた国では、民衆生活はすべての場面で警察機構に監視され、許可なく国内を移動することは禁止され、検閲を経ないニュースは存在しない。スターリン時代のソ連をモデルにした中央集権経済（命令経済）は機能せず、後に一説には300万人もの餓死者をだした。人々は飢えで死に続け、政治的迫害に苦しみ、何千、何万という若い女性が国境を越えて中国へ売られているのに、「社会主義楽園」の優位性を演出すると称して、軍隊と平壌住民のパレードが繰り広げられている。限られた財源を武器開発に用い、ミサイルをシリアやイランに売却して、さらに長距離弾道ミサイルを開発しようとしている。相当量の国際援助も飢えた人びとには渡らず、軍と党のイエラルシー（聖なる序列）の上層部に掠め取られている。そして何よりも、国中に作られた大規模な牢獄と収容所に象徴される理解しがたいほどの人権蹂躙が行われている。

本書は、国際的な人権活動家ピエール・リグロの姜哲煥へのインタビューをもとに構成されている。リグロは、「北朝鮮という国は国外からの情報を遮断して自国民を無知にさせているだけでなく、自国民に対する残虐な犯罪と強迫に関する国際世論の無知、無関心によっても利益を受けている」と確信し、姜哲煥に北朝鮮の過酷な生活を西側世界にしらせてはどうかと提案した。姜哲煥は金正日体制、とりわけ強制収容所の体験を白日の下に晒すことが自己の道義的責務だとして、その提案を受け入れた。こうして成ったのが本書である。リグロは、外交官であれ、政治家、ビジネスマンであれ将来北朝鮮となんらかの関係をもとうとする者は、次のことを知っておくべきだという。「対話相手となるのは地上最後のスターリン主義政権であり、15万から20万人の人間を強制収容所に監禁し、良心の自由を愚弄し、自国民を嘘で固めた大袈裟なプロパガンダで情け容赦なく痛めつけ、さらに、20世紀末に歴史上稀に見る飢饉を招いた責任を負う政権だということ」である。これ以上はないというほどのひどい「人道に対する罪」（「国際刑事裁判所に関するローマ規程」第7条）を無視して国交正常化交渉を主張する山崎拓や加藤紘一、和田春樹や姜尚中など、政治家であれ学者であれ、市民であれ、よくかみしめるべき指摘である。

楽園は虚構

姜哲煥一家は、1963年、金日成の帰国運動の呼びかけに応じて北朝鮮に渡った。祖父は貧困を逃れて済州島から日本に渡り、戦時中の米の販売、戦後のパチンコ屋で財をなして、総連傘下の京都商工会議所会長という要職にあった。祖母も済州島出身で紡績女工として日本共産党に入党、戦後、総連京都支部女性同盟委員長を務めていた。京都の高級住宅地に住んでいたが、金日成のプロパガンダが提示する共産主義建設の夢（ユートピア）に惹かれて、祖母の強い意志の下、一家は帰国を決断した。

希望に夢膨らませた彼らを待っていたのは、孤独、貧困、差別、密告、虐待の日々であり、強制収容所という結末であった。15時間の船旅で到着した清津の街について、姜哲煥の叔父は証言している。「街は廃墟のように静まり返っていた。行き交う人の身なりは乞食のようにみすぼらしく、その表情にはどん底の悲しみが漂っていた。」　迎えに来ていた先着の帰国者たちは、「北朝鮮には来るなと警告しておいたのに、どうして来てしまったのか」と一家に語った。そして頑なに総連を弁護する祖父母に対して、「北朝鮮の共産主義がどんなものか、すぐ分かる」と捨て台詞を吐いた。

しかし、莫大な財産を捧げ、スウェーデン製最新型の車ボルボを持参した在日有力商工人一家7人は、他の帰国者が地方に送られたのにたいして党幹部クラスの扱いを受け、平壌の公園のような高級住宅地を提供された。父は工業品商業管理所監督官という幹部職を与えられ、祖母は平壌市の女性同盟副委員長という要職をあてがわれた。それもあって、叔父・叔母は大学で医学、薬学、生物学、哲学等を学ぶことができた。父は平壌最大の写真館の所長にまで上り詰めた。

だが、機能しない日常生活（食糧、電器屋、病院、美容院等々）だけでなく、横暴の限りを尽くす党官僚の無能と腐敗、あらゆる分野に蔓延している閉塞感、「地上の楽園」のあまりの貧しさ、不断の監視と密告で挫折感と絶望、そして怒りを募らせていった。

絶滅させるのが目的

1977年7月、姜哲煥が9歳のとき、突然祖父がいなくなった。数週間後、国家保衛部が家宅捜索に来た。

彼らはカメラ、オメガの時計、母と祖母の宝石類、叔父の結婚用の品々、日本製テレビなど押収し、山分けした。そして父、祖母、妹ともども耀徳の収容所へ送られた。（英雄一家の娘であった母は収容所への連行を免れた。後に国家保衛部によって強制的に離婚させられた。）学会出張で留守であった末の叔父は、いち早く耀徳に送られていた。公式の理由は、「犯罪者の身近で反動主義的イデオロギーに汚染されてきた非犯罪者を労働と学習を通じて再教育する」ため であった。

最初の収容所の光景――鉄条網を張り巡らせたコンクリートの塀、見張り用の望楼、塵で固まった髪の毛と乞食のようなボロ服を纏った不潔極まりない囚人、土の壁と土を固めた床の小屋。10棟の小屋で1つの作業班が組織されたが、マッチもライターもないなか、小屋の隣人から基本的な生活の知恵を伝授された。手早く木を伐ること、乾いた薪を蓄えること、焚き火でトウモロコシを料理する方法、松脂を浸した灯心で炎を明るくすること、など。しばらくすると、いろいろなことを知るようになる。鉄条網に触れると警報がなること、山の頂上に武装した部隊がいること、罠が仕掛けてあること、逃亡を試みたものは例外なく死刑（公開処刑）となることなど。

囚人管理･監視のシステムはこうだ。収容所における労働は五人一組の「五人組」に割り当てられ、それぞれのノルマとなる生産目標が設定される。この五人組を10組集めたのが「分組」で、分組長が監視し、収容所の命令系統を潤滑に遂行する重要な役割を果たす。10棟の小屋からなる集落が「作業班」を構成し、囚人の中から監視活動の責任を負う「監督」が指名される。労働の細目は監督から五人組の代表に伝えられる。この監督は収容所全体を監視する「班長」に従属する。その他、材木や穀物などの収穫状況を調べ報告する係り2名、食料、道具、制服の配布状況を管理する者と特別な行事を組織する者2名も選任される。保衛員は囚人同士を監視するよう仕向け、スパイ網を張り巡らせて反抗的な者や保衛員の不正を幹部に密告しそうな者を罰する権限さえ与えた。姜哲煥は後に、ソ連やナチスの収容所でも同じ手法がとられていたことを知り愕然とした。

耀徳収容所も、鉄条網と監視塔だけではなく、自然の要塞によって外部から遮断されていた。姜哲煥が10年かけて知りえた収容所の構成は、一般収監者用の村（作業班）が４つ、再教育不可とされた村が６つであった。後者は、旧地主の親族や資本主義者や米国･韓国のスパイとされた者、キリスト教信者、粛清された党員など再教育が必要ないとされた囚人たちの「完全統制区域」である。そこで暮らす囚人は、表向きは存在しないことになっており、金日成･金正日の肖像を掲げることも、金日成の革命偉業を暗誦することも、相互批判と自己批判の集会に出席することも求められない。彼らは危険で困難な労働を強いられ死んでいくだけだ。一般収監者は悪天候のときは労働を免れたが、彼らは際限なしに働かされた。絶滅させるのが目的だからだ――「ミョルハラ」（滅ぼせよ）。また終身刑であるが故に、軍事複合施設の建設や軍需用品の製造工場など国家機密に属する施設で重労働を強いられる。

狂気と「ペラグラ」

収監された直後、一家が極度に恐れたのは、強制労の現場で過失を犯すこと、そしてそれに伴う追加労働働や独監房入りなどの懲罰であった。狭い独監房の中では正座を強いられ身動きできないため、刑を終えて自力で歩けるものはいなかった。この懲罰制度を支えているのが密告者網であることはすぐに理解できた。囚人の密告と相互密告は保衛員に強制されていた。

父と叔父は、飢餓や侮辱、絶望から自殺を試みた。しかし自殺は犯罪であった。党に対する反逆行為とされたからである。残された家族がその罪を贖わなければならなかった。家族への累に気づいて思い止まったという。祖母は「地上の楽園」へ家族を連れてきた責任で自分を責め、憤怒と絶望の入り乱れた不安定な感情に襲われた。すべては、彼女の人生を支配してきた共産主義の理想のためであったからである。北朝鮮という国家は、共産主義の名を騙る犯罪集団だと結論づけた。

収容所には狂気が蔓延していた。あまりのひどい仕打ちに発狂した人は数知れない。激しく過酷な労働、厳しい気候、絶望的なほど乏しい食事、慢性的寝不足、無意味な暴力と恐怖の中で常に精神錯乱の淵に追い込まれた。そして精神病隔離病棟に送られ死んだ。もう1つの「病院」は医療器具が聴診器のみ、薬品は炎症の薬のみで、囚人でもある医者の役目は労働に適しているかどうか判断することだけだった。

収容所の生活で最大の問題は、生き延びるために何とかして食糧を確保することであった。日の出から日の入りまで働いて配給されるトウモロコシは、大人一日500g、子ども400gでしかなかった。野菜は配給されなかったので野菜畑、保衛員の自留地から盗むしかなかった。他は野草を取るだけだった。野生苺は食い荒らされてしまった。ドングリの実をすり潰し、茹でてゼリー状にしたものも食べた。栄養失調と戦う気概を失った者はみな死んだ。希に魚も食べた。環境保護の名目で釣りが禁止されていたが、ありあわせのもので釣り道具を作って獲った。トウモロコシしか食べていないので、みな「ペラグラ」（ニコチン酸欠乏症）に罹った。爪は剥げ落ち、皮膚はザラザラになり目の周りに丸く深い皺ができた。ペラグラを防ぐためにもタンパク質をとらなければならなかった。蛙を捕まえて、新鮮なうちに料理するか日干しして保存した。蛙の卵も貴重だった。山椒魚は栄養たっぷりだった。ミミズも大事だった。収容所では毛皮用の兎をたくさん飼っていたが、姜哲煥は養兎場の責任者になったとき、保衛員家族に肉を渡した後の内臓をもらい、茹でて食べた。収容所を生き延びる重要な食料はネズミだった。焼きネズミは本当に美味だったという。収容所にはネズミを飼育し、ひそかに塩漬けする者もいた。この飢餓戦線をさまようような毎日の生活にもかかわらず、耀徳収容所でも数ヶ月ごとに「金日成主席のために外貨を稼ごう」というキャンペーンが展開され、野生の朝鮮人参やエッセンシャル･オイルを含んだ珍木、椎茸、金鉱石、砂金などのために特別動員令がでた。それはあまりに悲しい対照である。

耀徳での死は、飢えや処刑、厳しい自然環境によるだけではなかった。 恐ろしい事故がしばしば起こった。あるとき、子どもたちが石切り場で土の掘り起こしの作業をしている最中にトンネルが陥没したことがあった。教師は「折角掘った崖を埋めるなんて骨折り損じゃないか」と罵詈雑言を浴びせた。瓦礫の中から５～６人の子どもを引き摺り出すのが精一杯で、残りの少年はみな死んだ。姜哲煥は凄まじい怒りで打ち震えた。彼はこの怒りを決して忘れなかった。

無意味な「儀式」

1984年、姜哲煥は収容所で16歳の誕生日を迎えた。それは、責任ある大人となった日で、過失は死（銃殺）をもって償わなければならなかった。思想性を問う自己批判の集会にも参加するよう命じられた。それは、均一の思想を頭に叩き込むことを目的とした無意味な「儀式」でしかなかったが、恐怖と憎しみを伴う耀徳の批判集会は、極度の緊張の中で実施された。水曜の集会は20分ほどだが、土曜の夜は2時間も続いた。各作業場班で自己批判の予行演習をして、そのメモを監督官に提出する。そのうち興味深いものが選ばれ、集会の演壇で自己批判する。偉大な首領様と親愛なる指導者の「思想」を引用するのが決まりであった。自己批判が評価されると批判者は誰か別の人を告発し、批判しなければならない。この自己批判―相互批判が延々と続く。文字通り無意味な儀式であった。
この思想教育を維持・発展させるのが義務であった。収容所で大人になると、自分の思想性を改善していく過程を「党の政治」、「金日成同志と金正日同志が実践した革命歴史」、「人生の評価」という三冊のノートに記録し、批判集会の時には必ず携行しなければならなかった。

その他にも再教育の実践プログラムがあった。週２回の革命歌（金日成将軍にちなんだ歌）、金日成の思想と生涯についての学習（その中心は党の機関紙『労働新聞』の記事の読み上げ）、年の初めの金日成の「新年辞」の読み上げとその後の暗誦大会、１月１日の正月、金日成･金正日の誕生日の祝典、９月９日の建国記念日、１０月１０日の労働党創建記念日での革命映画の上映等々である。
この剥き出しのプロパガンダ教育は北朝鮮全土で、そして耀徳の学校でも行われてきたが、収容所ではまったく成果はなかった。収容所では子どもも大人も禍から身を守り、生き残ることだけを考える。心を支配するのは無関心と虚無感だけだ。いくら思想教育をほどこそうとも、党に対する忠誠心やら金日成･金正日に対する崇拝やらは消えうせてしまう。崇拝すべき存在は憎悪の対象でしかなくなる。（次号に続く）

“NO FENCE！”の想い、鹿児島県川辺町でも一灯が

収容所 ／ 傍観者から行動者へ

ジェフリー・S・アイリッシュ

児島エリアの世話人を通じ，英訳ボランティアを引き受けて下さった方が執筆された新聞の「コラム」を紹介したい。執筆者は，南九州市在住のジェフリー・アイリッシュさん。民俗学研究，翻訳・通訳などのお仕事をされている。09年中頃には，氏による英訳本，民俗学者・宮本常一の代表作「忘れられた日本人」が米国で出版予定されているとのことだ。
アイリッシュさんの新聞のコラムの一文にある，『傍観者から参加者，協力者，または責任者になる。』は，まさに『人間としての基準を上げる』ことなのだろう。（も.）

パン屋をやっている友達から電話が来た。「東京で開かれる国際会議のために，北朝鮮の強制収容所に関する文書を英語に訳してくれないか」と。「英訳のために支払うお金はないが，パンで支払うことはできる」と。
北朝鮮の収容所について改めて勉強ができるのと，お互いができることの物々交換という発想にひかれて，この仕事を引き受けることにした。
前々から民放のテレビ番組で取り上げられてきたように，北朝鮮の山奥には，少なくとも六つの収容所がある。囚われている人口は，二十万人を超えると思われている。
食糧は一日数グラムの塩と数百グラムのトウモロコシ飯のみで，毎日十四時間も，金山や農業，衣類やレンガ作りの労働をさせられている。その上，警備員によって非人道的に拷問や暴行を受け，殺害されたり，ナチドイツを思い出させる医療実験にも使われたりしているという　政治の悪口を口にした人や，中国へ逃げようとして連れ戻された人は，赤ちゃんから年寄りまで家族全員が収容所に入れられる。　この北朝鮮の卑劣な奴隷制度は，約五十年前から続いていると知り，私は改めて驚いた。　翻訳の仕事を終わらせて思った。我々は完全に麻痺していると。
日本や世界の至る所で，人間の残酷な行為を見せられれば見せられるほど，現実性がなくなってきているのではないか。ニュースをドラマとして見たり，読んだりするようになっている気がする。

“傍”

ふと，清水寺のお坊さんのように，今の時代のことをどの字で表すかと考えた。「傍」という字が浮かんできた。テレビの前にただ座り，人の苦をひとつの娯楽として傍から覗き込む「傍観者」の「傍」。
これは，鶏をつぶした時のことを思い出させる。仲間の首を切っているのに，他の鶏は，何事もないかのようにその辺を歩きまわり，地面を突っついていた。　マスコミが，収容所のことをさらに徹底して取り上げたとして，はたして世論は動くだろうか。ただ相手のことをかわいそうと思って，いつものように晩御飯を食べて，風呂に入るが大半だろう。　そろそろ我々は，人間としての基準を上げないといけないのではないかと私は思う。
金正日が，どんな手を打つのかがわからない中，北朝鮮に対する行動は確かに難しい。それでも，海のすぐ向こうで，同じく人間である仲間達が，人間として扱われず，こんなに苦しんでいることに対して，我々は反発すべきだ。　収容所のことに限らず，世界，国，地域の多くの問題の中から，我々一人一人が一つの問題を選んで，それに対して勉強し，他の人に伝え広め，解決に向けて行動をおこす。その行動は小さくてもよい。組織の援助でも，個人的な工夫でもいいと私は思う。　傍観者から参加者，協力者，または責任者になる。そう意識し行動する人が増えばと思う。
私の好きな詩人が問いかける。
「自分が思うことのために，自分が持っている力のすべてをかける気持ちがありますか」

【文中下線部：2009.1.25南日本新聞掲載の文章では記載漏れを，筆者加筆。】